

# 護園派の漢詩論

船津富彦

## 序記

徳川三百年の儒學の世界で最も大きな光芒を放つた人に荻生徂徠がある。彼の主張した古學復古の叫びは日本のみならず本國の中華にも甚大なる影響を與へ、その功績は赫々たるものがあつた。それは儒教方面のみでなく、詩の世界に於ても彼は實に偉大なる仕事を殘してゐる。即ち徳川の詩風は古來云はれる如く三變してゐる中第二變の變動の大爆發を起したのが徂徠である。先に木下順庵(註1)によつて主張された唐詩復古の聲は當時に於て未だ明詩崇拜の余燼強く一般の大家をしてそれに従はせるだけの力が無かつたが、やがて物徂徠の出現によつて、その種は遂に發芽を始め、怒濤の如く各地に傳播して行き、こゝに大きなエポックを作つた。唐詩崇拜、今迄その微力な叫びに對し、余り注意を引かなかつた人

々も急に刮目し始め、その説に對し勇敢に反對する人、又無批判に迎合する人もあり、極めてその論争は賑かなものであつた。

この徂徠を中心とする護園一派の詩論は彼が學者として有名であり、時代の世師として尊崇された爲め、いろ／＼な意味で注目に値するものがある。その主なる學者としては徂徠、その弟子の大幸純、服部南郭等を擧げる事が出来る。彼等の共通せる主張は唐詩復古ではあつたが、極めて狭い觀念に束縛されたものであつて、李千麟の著と稱せられる唐詩選を通じてのものであつた。このテキストはいろ／＼選者に對する説はあつたが、唐詩選による唐詩復古は甚大なる功のあつたことを見逃すわけには行かない。それだけ此の派に對する反動も大きく、種々な攻撃を受けてゐる。が徂徠が

一代の碩學であつた關係から、此に對する辯護論も又仲々殷盛を極めた。やがて此の二者の争ひは大きな渦を生じて、次の時代へと流れ去つて行つた。

註1 弊審詩話(西島長孫著)曰、國初以來、詩宗宋元、至先生(順庵木下先生)斷然唱唐詩、英傑之士四方來歸焉。

## 本論

### (イ) 荻生徂徠の漢詩論

後世の人々からは學問的に人格的にもいろ／＼の批判はあつたけれど徳川時代の多くの儒者の中で、我々が眞に文章家として擧げ得る人に徂徠がある。彼は學者であつて、詩人ではなかつたが、彼の卓越せる學識から滲み出た詩論は、此の時代の詩の評論界に於てピカ一の光を放つてゐる、といつても過言ではあるまい。彼は詩について

特別に著述したものは、彼の他の著述に比べて極めて少く、その主なるものは彼が弟子に口授筆記せしめた詩源と、出羽莊内の大夫水野氏に答へた書牘集の詩文國字牘（註一）等である。この外は、彼の詩に對する論は他の著述の中に極めて微量ではあるが、金玉の光を放ちつゝ散在してゐるに過ぎない。今此等を拾ひ集めて、こゝに徂徠の詩論を體系づけてみたいと思ふ。

彼は詩に對し如何なる定義を持つてゐたかといふに、詩者言也（徂徠集卷十八、跋詩箋）といふ考へをしておつた様であるが、言の内容については、別に述べてゐない爲め不明である。たゞ卷十八、類唐後詩總論後に古聖人之言曰、溫柔敦厚詩之教也、是千萬世言詩者之刀尺準繩、

といつてゐるのをみれば、あれ程偉大な足跡を残した徂徠も、詩の本質については、儒教的詩觀から一步も前進してゐなかつたのかもしれない。が彼の名著と稱せられる論語微の中で、詩經の詩について論じてゐる言葉は注目すべきものがある。則ち

詩之爲言。人情世態。莫所不包。瑣細。纖悉。婉而不直。其言初不可必以爲訓。

又不可必以爲戒。而人各以其意取義。義類無常。轉轉不窮。又以諷詠發之。使人不知覺。故必學詩而後有所鼓舞。觸類以長。意見益廣。新知紛生。乃能有所振起、於衆人之中、斐然成章（論語微。泰伯。子曰興於詩章）

といつてゐる。此によつて見ると、彼は詩經が道德の教へではない、人情世態を歌つたものだと言張し、詩經を道德的に説明した宋學者の説に反對してゐる。此の考への最も纏つてゐるものは、徂徠先生問答書に表れた考へで

詩文章之學ハ無益成様御思召候出、宋儒ノ詞章記誦ナドト申候ヲ御聞キ入候事、年久數候故、左様思召候ニテ可有御坐候、マヅ五經ノ内、詩經ト申モノ御坐候、是ハタゞ吾邦ノ和歌ナドノ様ナルモノニテ、別ニ心身ヲ治メ候道理ヲ説キタル物ニテモ、又國天下ヲ治候道ヲ説キタル物ニテモ無御座候、古ノ人ノウキニツケ、ウレシキニツケ、ウメキ出シタル言ノ葉ニ候ヲ、其中ニテ人情ニヨク叶ヒ、言葉ニモヨク、其時其國ノ風俗ヲシラルベキヲ、聖人ノ集

メ置キ、人ニ教ヘ給フニテ候、是ヲ學ビ候テ、道理ノ便ニハ成不申候ヘ共、言葉ヲ巧メシテ、人情ヲヨクノベ候故其レニテ、心コナレ、道理モネレ、又道理ノ上バカリニテハ、見エカタキ世ノ風俗、國ノ風儀モ、心ニ移リ、ワガ心オノヅカラニ人情ニユキワタリ、高キ位ヨリ賤キ人ノ事ヲモシリ、男ガ女ノ心ユキヲ知リヌ。カシコキガ、愚ナル心アワヒヲモシラルル益、御坐候。又詞ノ巧ナル物エハ、其事ヲイフコトナシニ自然ト其心ヲ人ニ會得サスル益アリテ、人ヲ教ヘ諭シ、諷諫スルニ益多ク候。後世ノ詩文章ハ皆コレヲ祖述致シ、殊ニ時代近候故、會得ナリヤスキ筋多候故、左ノ心持ニテ學候ヘバ其益多ク御座候。

といつてゐる。此の考へは彼の詩經に對する考察ではあるが、詩が「古の人のうきにつけ、うれしきにつけうめき出したる言の葉」といふ表現から見ても、詩に對する見解が付度出来る様に思はれる。尙此の考へは陽貨篇（論語）の子曰、小子何莫學夫詩章に

大氏詩道性情。主諷詠・觸類而賦。

といふ考へになつて来る。(註2)この考へを裏付するものに、答崎陽田邊生(徂徠集卷二十五)

夫詩情語也。喜怒哀樂鬱乎中。而發乎外。雖累百千語。其氣不能平。於是不得已而咨嗟之。咏嘆之。歌乎口、舞乎手。片言隻語其氣乃洩。吾情可以暢。故詩之至長者。纔與文之至短者相抵。而二者並行。千古今聞。莫有優劣。詩情語也。文意語也。所主殊也。

といつてゐるのを見ても判然とする。即ち詩は心に思ひ余つた時、それが文字に言葉に表現されたものであるといふので、恐らくは詩經大序の影響(註3)を受けたものであるまいか。後に彼の弟子春台は、此の意を敷衍して、詩は不平之思より出づと説いてゐる。(註4)徂徠の詩に對する根本は、儒教的詩觀から出たのではあるが、それに準らずして新しい詩觀を作つてゐたことは、大いに偉とするに足る。

次に彼の詩觀で最も注目すべきことは、漢文の本質についての問題である。これは引いては漢詩にも及ぶ問題で幾多の論争の

主眼になつてゐる。

彼の論によれば、漢文は日本的に訓讀すべきではなく、中華音にて讀む可きであるといふのである。この考へは何時頃から考へられたものか、その年代は明瞭ではないが、徂徠集中に譯社約の一文があり、それによれば、當時支那學者として著名であつた岡島冠山から毎月六、七回中國語を習つてゐた様で、その結果であつたらしい。彼のこの見解は題唐詩後詩總論後(徂徠集卷十八)に細かに述べられてゐる。

人(本邦ノ人ヲ指ス)不識華音。讀者作詩。一唯和訓是憑。遂致窮海萬里。其弊也視麗若華。則裴頠倡陋。

といひ、又同じく

然和訓讀字。其弊自若。唯識意義。而不諳格調體勢爲何物。

といつてゐる。尙彼は同意義のことを、答

崎陽田邊生(徂徠集二十五)又與江若水(徂徠集二十六)等にも述べてゐる。即ち彼の考へ方によれば詩文は中華音を以て學び、解釋をすべきで訓讀することは意義のみ取るので、格調體勢が解らないといふのである。この論は漢文の一番問題になる處で、

古來何度となく論じ來り、論じ去られたもので、支那文學として、又哲學として考へ

る時は、當然徂徠の考へが是なるものである。然し徂徠の主張せる如く、現今の中華音が絶對的にその當時の音を示してゐるとは云へない時、一つの問題が生じて来る。

又永い歴史に於いて、訓讀されて來た漢文は、遂に一定の型を持つ日本文に作られる様になつた物は、此も疑問であらう。兎もあれ、徂徠が此の考へを持つたのは、彼の中華崇拜から出た論であつて、それから自然と觀念づけられたもので、漢文そのものについて、熟考した結果ではなかつたのであるまいか。この論に對し、當時及び後世の詩家から、痛く攻撃の矛が向けられ、中井竹山の門距余筆や山本北山の作詩志叢等には最も烈しく反對し、稍々もすれば感情論に走つてゐる。

第三に彼は詩の格調説を述べてゐる。格調説は彼獨自の説ではなく、既に虎關禪師(濟北詩話)が取り上げ、當時に於ては白石(白石先生詩範)(註5)も此を論じてゐるが、徂徠の格調説は前述せる如く、中華音學習の結果からであるらしく、この點が

他の人々と異つてゐる。彼は詩に格調の高いことを尊び、答稻子善（徂徠集二十七）に

大氏格、猶人之品也。故貴高。調猶人之儀、故貴稱。

といつてゐる。彼は詩には格調がある可きで、その格調の高い程良いので、その原因は人間の品の如きもので、品も高い方がよいからだと説明してゐる。その結果、彼の詩も格調が高く作られ、後世「詩モ亦格調、多クハ高古ニシテ、學問詩人ト雖モ、及ビ難キモノ」（井上哲次郎著「古學派の哲學」物徂徠、文藻）と評せられる様になつた。

この格調説の結果、更に發展して詩語説となつて來るので、それは時代にはその時代の語があるといふので、答稻子善書中で盛唐自有盛唐語。中晚自在中晚語。古詩自有古詩語。歌行律絕各自有其語。不可強合。苟學其語。習之熟而格調自至。

といふことを云つてゐる。彼は中國にはその時代、時代の語があり、それを習ふこと

によつて、自然と格調が會得出来るといふことを云つてゐる。これは日本人が作詩する時どうしても、その時代の格調といふものが學び得られなかつた爲に、かく云つたものであらう。この考へは春台によつて更に分類され、獨用之辭と、通用之辭（註6）とにより、彼の缺點を捕つて展開される。（後述）そして、この考へは更に詩には詩語があり文語とは異なるといふ考へになる。それを實證づけるものに、徂徠先生詩文國字廣の中で

詩家に用ひ候語、自ら一種有之候。愚老世上の詩を作り候者を見候に、大既皆清弱にて力なく、枯槁にて豊ならず候、畢竟詩は春秋之吹き來り、花木麗しく輝き、天然と富貴なる模様有之候を、肝要と致し候に、右の如く清弱枯槁に作り候ては、何ぞ詮も無之。下手の文に平仄韻字を正したると申分にて候、弊の由來を察候に、大概初學より皆一片の經學なる故、讀書の語わずかに詩中に入候へば、富貴なる模様なく寢しくしてさぞし氣なる有情を覺え申候。然其詩家の語、よく我物に相成候

時は、老杜が詩集、及び王世貞が四部稿に見れたる詩の如く、すでに經文を用ひて作りたる句、有之候事は苦しかるまじく候。

といひ、詩には經の文章語を用ひるのが、一番良いといふことを云つてゐる。此は今迄に主張されたことも無く、徂徠にして始めて云はれたのである。何故に經書の文字を用ひねばならぬかといふに、經文の句を取るなら、清弱枯槁でなくなるといふのである。恐らくは復古學者として徂徠が、學則四にも主張してゐる如く、「古有聖人、今無聖人、故學必古」といふ考へから出たのであらう。然し此の主張も、後世の詩論家からは、大いに攻撃の材料になつてゐる。尙、詩には詩語があるといふ考へは、日常の讀書の時には注意しておつて、作詩の時に隨時に此を用ふるのが良いと、又同文中に

唐詩の語を類を分ちて書拔き、文選或は古詩記等の詩を御學び相度候。其世を以て類を分ち書ぬき、各別に篋中に貯へきざれ申さる様に、一語を御用て相成り、篋中より御出し、以て御用ひ

可相候。

といつており、又答崎陽田邊生に

有三百篇語。有漢魏六朝語。初盛中晚

唐宋元。是語以代異也。古風近律絕

長短五七言。是語以休異也。以此觀之

得意而不得語者、不能盡夫詩也審矣。

といつてゐる。こうした考へは既に新井白

石等によつて主張されてゐるので、徂徠獨

自の考へであると云へないが、かくして

詩を作つた結果は、換骨脱胎的となつてし

まふではあるまいか。特にその亞流にな

つた時、この考へから一步も出なかつたの

で、その弊害が増大して來てゐることは注

目すべきである。こゝで問題になることは

詩語が文章語と異なるものがあるならば、前

述の如き經文の語を用ひるといふことと、

大きな矛盾を生じて來る。更に此の考へは

弟子の服部南郭の考へとなつて展開されて

ゐる。(南郭の條參照)

次に徂徠は當時の詩界を如何に見てゐた

かを考察するならば、復安澹泊(徂徠集二十

八卷)に

大氏五山禿子。崇尚蘇黃。過於詩書。

片言隻字。援爲典常。流風所被。滔々

至今。

と評してゐる。徳川の初期に於ては、未だ

五山の余盛盛んで、蘇東坡や黄山谷が尊ば

れてゐたので、當時未だその風潮が強かつ

たのであらう。尙、題唐後詩總論後(徂徠

集十八)に

昭代御運。文教爵興。而人稍々譏操唐

音。然和訓讀字。其弊自若。唯譏意義

而不詰格調休勢爲何物。是以但認晚秀

緩慢者。以當乎溫柔和平之音。或經生

作詩。先入者爲主。則宋風淪髓。汗下

不能祛。其最惑人者崎人之詩。日與華

客相酬和。則見以爲承淵源。

と評してゐる。これは明かに彼の持論から

出てゐるのであつて、最も漢詩の痛い處を

論じてゐる。又彼は當時の詩界の缺點をば

跋詩筌(徂徠集十八)に

世之學詩者。廼不嫻手辭而欲其巧。諸

舍規矩。而學大匠之所爲。豈可得乎。

といひ、又、答崎陽田邊生に

獨宋時學問大闢。人人皆尚聰明以自高

因壓主情者之似癡。遂更爲伶利語。雖

詩實文也。……今觀此方之詩。多類宋

者亦主意故也。

といつてゐる。即ち宋詩の惡影響を受け詩

文國字讀でも評してゐる如く、清弱で枯槁

だといつてゐる。

然らば彼の理想の詩はいふと、以上の如

き缺點を除いたものであつたらしく、徂徠

先生詩文國字讀の中で

詩は春風の吹來り、花木麗しく輝き、

天然と富貴なる模様有之候を肝要と致

し候、

と述べてゐる、が彼は詩意は豐滿で雄大で

あり、極めて美しい感のするものを良きと

し、清弱枯槁の詩をば退けてゐる。

最後に彼が何故唐詩復古を叫んだのであ

るかといふに、以上の如き時流の缺點を救

はんとした爲であり、特に唐詩選を尊重し

たのは、次の如き事情であるらしく、復安

澹泊書中に

蓋不侯少々時。已覺宋儒之說。於大經

有不合者。……中年得李千麟王元美集

以讀之。率多古語。不可得而讀之。

於是發憤以讀古書。其書目不涉東漢、

以下亦如千麟氏之教者、蓋有年矣。始

自六經、終于西漢、

とあり、又題唐後詩總論後に於て

獨余則謂干鱗於盛唐諸家外。別構高華  
一色。而結不離盛唐。細視其集中。一  
篇一什。亦皆粹然。不外斯色。所以爲  
不可及也。

と云つてゐる。彼が唐詩復古を叫んだのは  
中年以後で、その理由は前代に於いて尊崇  
された宋詩の缺點を知ると共に、その根元  
ともなつてゐる唐詩へのあこがれとなり、  
唐詩を崇拜する様になつたらしい。特に李  
干鱗の學立場を慕ふ余り、痘痕も鬢式に  
彼の著と稱せられた極めて杜撰な唐詩選を  
崇重する様になつたものらしく、唐詩選そ  
のものに、文學的な價值があつて、尊重し  
たのではなかつたらしい。彼の學派が金科  
玉條とした唐詩選は、以上の様な三段論法  
を経た如く思はれる。そして彼は跋唐詩選  
(徂徠集卷十八)に於て

今閱此刻。剔扶幾輩頓後舊觀。三峯突  
然在人目睫。豈不愉快乎。

と云つてゐるのは、彼の喜びが如何に其大  
なものであつたが知れる。

以上徂徠の詩論について概説したのであ  
るが、彼の詩論は極めて創造的とは云へな  
いけれど、部分的には中華音讀説や、經書

等の文字使用説に、その片鱗を知ることが  
出来る。但科學的な論據を缺いた爲めと、  
彼の地位からして幾多の論争を巻き起して  
ゐることは、注目せねばならぬ。又彼の秀  
れた弟子達、春台や南敦等によつて學説が  
集大成されたが、その根元は彼から出てゐ  
ることを忘れてはならない。

註

(1) 徂徠先生詩文國字讀日本文庫にも  
あり、題名は徂徠先生問答書とある。

(2) 護國六筆中にも同文の章がある。

(3) 詩經大序曰 詩者志之所之也、在  
心爲志、發言爲詩、情動於中、而形於言  
言之不足、故嗟嘆之、嗟嘆之不足、故  
永歌之、永歌之不足、不知手之舞、足之  
蹈也、

(4) 後述 春台の條參照

(5) 白石先生詩範、曰「唐ニテ初唐盛  
唐ノ詩ヲ諸体共ニヒタト見候テ、ソラニ  
覺エ候テ、味ヲヨク／＼覺エ候ト、自然  
ニコナタノ申出ス事モ、ソレニ覺エ候テ  
味ヲヨク／＼覺エ候ト、自然ニコナタノ  
申出ス事モ、ソレニ似申サウニ覺ユ、  
句調ヨクウツリ候テ、サテ一時ノシメ

タ、リノ體格品々候ヲヨク心得迄ニ候、」  
(6) 後述、春台の條參照

(ロ) 太宰春台の詩論

徂徠の學統を受けた弟子の中で、一番文  
學的な影響を受けたのは春台である。彼の  
詩に關する論は詩論、及び斥非によりて窺  
ふことが出来る。

彼の詩に對する考へは、徂徠のそれを無  
批判で受け入れたのではなく、春台はそれ  
を基礎として新しい考へを展開させてゐる  
點が偉とする。それは詩論の附録に

余少不好明詩、老而滋甚。徂徠先生選  
明詩而名以唐後詩。中載李干鱗七言絕  
句無一首不佳。故載之最多。純謂干鱗  
所爲、唐詩非唐。而七言絕句爲甚、因  
而暇取唐後詩。就先生所選、而指摘干  
鱗七言絕句之瑕疵。

と云つて、手痛く徂徠の干鱗崇拜に反對し  
てゐることで、その反對の理由は詩論に  
唐人詩多漫興無題。因事而發。所以有  
自然之妙也。宋元則不足論。明人之詩  
其多數倍唐人。且如與人贈答。唐人不  
過一二首。明人多至十余首。寡亦不下

數育。言盡而意不給。故多用事填塞。據唐人或語。而綴輯以成章。其巧在釘鉅。篇章雖多。無復異味。李千鱗最有此思。王元美曰。三首而外不耐雷同誠哉。

と述べてゐるのをみても、判然とすると思ふ。即ち明人は唐詩の模倣であり、何等新味もなく美點もない。その弊害の最も甚しい者が千鱗であると評してゐることは、徂徠の學統を繼いだ春台としては珍しいものであり、又當時の學界の狀態からみれば、これだけの説を公開したことは偉とせねばならぬ。かくの如く徂徠の詩論とは異つた考へを持つてゐた春台は、詩に對して如何に考へてゐたであらうか。文論に自有文辭而有詩。詩者出於人情之不能已者也。人心不能無思。思而弗已。則形於言。發於聲。詩乃心聲。といつてゐる。これは詩の大序に於ける表現形式を用ひて、詩を説明してゐるが、詩は思也と斷じ、新しい學説を提起してゐる此の考へによると、詩論に

夫詩者所以言志也。其本出於思。無思何作。故古人不作詩。

といつて志の根本に思を置いてゐる。則ち夫詩何爲者也、詩出於思者也。人不能無思、既有思則必發於言、既有言則言之所不能盡、必不能不詠歌呻吟以舒其憂鬱。故古者謂之詠言可歌也。

と云ひ、詩と思は同音とは云ひながら、此の定義によつて、彼は獨目の詩論を展開して來る。

大凡古人作詩、皆必有不平之思。然後發之詠歌。不能已者也。否則弗作。是以古詩作者不多。而一人不過終身一二作而已。其餘詩人之名無用。此古詩之所以不多也。

といひ、古詩には不平之思が多いといひ、此の世に於て不平之思がなければ、作詩せずとし、然るが故に、上代に於ては作品が少かつたと述べてゐる。

余嘗觀三代之人不作詩也。其有作詩者皆有思者也。無思不作。故孔子一生不作詩。唯其去魯而歌。見於家語。臨河而歌。見於孔叢子。是一時感慨之發耳

(詩論)

と論じてゐるが、この論理は極めて不自然で、恐くは孔子は一番不平の多かつた人で

はあるまいか。この考は詩は思也と斷じた結果の余勢であつたであらう。勿論春台の考へも、詩といふ一面を考へるならば、一考すべき點はある。これを實證づけるものに紫芝園漫筆卷四に

詩以氣爲主。且如荆軻易水歌。項羽城下歌。誦之使人悲歌慨慨。非ニ有豪宕之氣。能若是哉。今誦其詞。猶能動人。況當時其聲者乎。故爲詩者不可以無豪氣。若夫柔懦卑屈者。其詩亦不足觀也已。

と云つて荆軻や項羽の作にその價值を見出してゐるのは、以上の論から當然歸結されて來ると思ふ。

更に春台は徂徠の詩語論の影響を受けたと見えて彼獨特の論を立ててゐる。則ち

夫修辭之首。務擇其辭。且如爲詩。自風雅而下。歷漢魏六朝。以至於唐詩。各有其辭。不可相亂。相亂則失休。不成家數。然詩辭又有二焉。有獨用之辭有通用之辭。如風雅之辭。不可以入漢魏以後詩。六朝辭不可以入唐詩。是獨用之辭也。如風雅之辭。而可以入漢魏六朝詩。亦可以入唐詩。是通用之辭。

といつてゐる。然し彼は具體的に述べてゐないので、詳しくは解らぬが、獨用之辭は各時代獨自のもので、此はその時代の詩でなければ不可であり、通用之辭は何れの時代にも共通して用ひられるものであるとしてゐる。これは徂徠の詩語説で行くと、極めて矛盾を生ずることは前述の通りであるが、その缺點を除く爲に、考へ出された知的な説であらう。

最後に春台は、詩經を當時道徳の書として見てゐたことに對し、文學として見ようとしたことで、春台先生文集後稿初篇卷四の朱子詩傳骨亡後序に

宋儒不知詩。

三百篇之列于六經。則

視三百篇之詩。如聖人言。於是說詩者。一句一字。必求其義。其疾也固。

遂以三百篇詩爲經。漢魏以後詩爲詩。

自是古今之詩。岐爲二途。學者惑焉。

殊不知大經者聖人所以治天下之具。而

詩其所以達人情也。夫人情無古今之殊

則詩之所以達之。

といつてゐる。これは稍々もすれば、長いこと詩經が經書であり、文學書とみられなかつた當時にあつては刮目すべきことの様

に思ふ。この考へは要は彼が哲學者でなく文學者であつた爲の根本から出た考へであつたのではあるまいか。かくして詩經が始めて文學書としてクローズアツアされたのは大きな問題である。

#### (ハ) 服部南郭の漢詩論

徂徠門下で、春台に匹敵する人といふならば、我々は先づ服部南郭を思ひ出す。彼の詩に關する著述としては、南郭先生燈下書といふ詩話に關する本があるが、これによつて我々は南郭の詩論の大體を推知することが出来る。彼は詩について 唐詩選國字解の附言に

詩人は風雅の道とて、風月にこゝろよせて、人情をやさしく云ふこととなるゆへ、詩經三百篇などの体こそちがへ、風雅の道は失はぬ。

といつてゐる。詩人が風月に心を寄せて、人情を優しく云ふといふことは、和歌論的な考へで、中國人にはない考へである。中華崇拜の盛んだつた護國の後材に、この詞のあるのは、詩といふ型を借りても、本心は日本人の考へになつてゐることで、後世

山陽が大聲叱呼してゐるのを見ても甚だ面白いと思ふ。

更に彼は詩について南郭先生燈下書で

詩文ハ君子ノ詞ニテ候ヘバ、必ズシモ

匹夫匹婦ニヨク通ズルタメノ物ニテハ

無之候

といつてゐる。詩は匹夫匹婦のものでなく君子の持つものであるとした點は、即ち詩の世界に階級性があるとしたのは、如何にも封建下の儒者らしい考へで、唯我獨尊的である。そして

スベテ詩家ノ詩ト申テ一種別ノ物ニ候といひ、詩は貴族的なものだといふ見解は詩を學ぶには相當の學力を必要とするものであることを云つてゐる。この世界は衆衆とは離れたものであり、故に使用の語も特別なものではなければならぬとし

スベテ詩家ノ詩ト申テ、一種別ノ物ニ候、世上不案内ノ詩人ハ、詩ノ詞モ文ノコトハモ分チナク覺エ候程ニ、オノヅカラアシク聞エ候、經書ノ字モ律絶ナドニハ大方ハ用ガタキ事多候、佛經論ノ詞、六朝ヨリ唐世迄名匠トモ多ク用ヒシ候故、能コト葉多ク候禪錄ナ



ドノ語ハ、文飾モ無之、故ニ詩ニ不入候。スベテ隨分響ノヨキ文字ヲ取申事ニテ候故ニ、詩家ノ文字ハ格物ノ物ニ候、我ハ儒者ノ詩成トテ、何ノ差別モナク、經書ノ字ヲ用ヒ候事ナト、世儒ニオホク有之候。トカク古人ノ詩ニ用ヒタルヲ、ヨクヨク御見分候ベシ。

といつてゐる。この詩語説は、徂徠の説そのままを傳承したものであるが、經書の文字を用ひることに反對をしてゐることは珍らしい。詩家の用ひる文字が、他の語と異なることは、創作者としては無理もないことで、一定の形式の中に滿ち溢れる感情を入れるには、その語そのものが單なる表音的なものでは表現し切れず、どうしても表意的である事を要求して来る。彼がその事を見抜いた點は偉とするに足るものであつて、詩に六一一詩話を始め、詩語に關する特別な研究が表れて來たのも、こうした叫びによるものと考へられる。こうした詩語は更に詩の体によつて、又一定の定りがあるとして、

詩ノ諸本分チ候事、御心得專一ニ候、  
五言古詩七言歌行、五言律七言律七言

絶五言絶五言律、皆々体格別ノ物ニ候、古人ノ詩ニテ御見分御心得候ベシ、或ハ絶句ニ用ヒ候テハ、甚ダ響カザル字ニテモ、律詩ニ入候テハ、相應ナル有之、律詩ニ入候テ弱ク聞エ候、文字ニテ絶句ニテハ流暢成モ有之。律絶共ニ用ヒカタキ文字モ、排律ナトニ入候テ、典麗ニ聞エ候モ有之候、其余古詩歌行ニ入字、近体ニ難入文字多ク詩是ヲ分チ候心得ハ、始ノ間、タトヘバ七絶ヲ作ル内ハ、ヒタスラ絶句バカリヲ習熟シ、大樣此句カラノ物ト申規矩胸中ニ出來ル物ニ候。偕又五律ニ移リ又其通りニ古人名匠ノ五律計ヲ熟リテソレヨリ次第第二七言律、古詩ニモ移リ候ヘバ、自然ニ其格分レ申候、

といつてゐる。彼の考へによれば詩には詩にのみ適する詩語があり、更にそれは詩体によつてその詩語も相異するといふのである。理論的にはこうした考へも一應は考究されるけれども、實際こうした事は作詩上は表れては來てゐないし又、そうしたものは無い。これは恐く南郭の頭で作つた詩論であらう。こうした詩論から彼の理想の詩

といふのは、同書に

スベテ詩ヲスボク細クツクル事ト巧過ダルトハ惡敷候、三休詩ナトニ入候詩多ク晚唐ノ枯瘦シタル候ニテ、法ヲトルニアシク候。寒乞ノ相トテ士人モ笑ヒ候事ニ候、雄渾悲壯ナト申モ、オホカダスコシ大カマヘニ作ルウエニ申事ニ候。コトサラ七律八大ナルヤウニツクル事、勿論ニ候。七絶ハ流暢ヲ專トシ、コト集モ一直下ニナル機ニスベキ事宜敷候。

といつてゐる。以上の様な缺點や長處を伸したのが、最も良き詩といふのであらうか。この「スボク細ク作ルコト」と「枯槁ニ作ル」といふことに反對してゐるのは、南郭の獨自の考へではなく、彼の師である徂徠の詩論（前述参照）の影響によつたものであらう。

## 結 語

徳川三百年の詩壇にあつて、大きな功績を残した護國一派の人々は徂徠、春台、南郭によつてその光を益々後世に輝かさせてゐる。彼等の詩論は大休徂徠の説を最大限

（一五三頁（ハツク））

朝日新聞社古典講座第一集

西 鶴

朝日古典講座は不定期に年二三回催される。毎回の講座は趣向を變へて催されるが、從來この講演がその日の聴講者以外に傳へられずにきたことは、學究的な貴重な内容を持つ講演であるだけに惜しい氣がする。今度初めて發刊された第一集「西鶴」は、昨年夏季、東京の朝日講堂で催された時の講演集である。藤村作「西鶴の構想」陣駿康隆「西鶴文學の本質」、片岡良「西鶴と近代文學」、里見弴「西鶴私見」と四人四色の觀察をしてゐるところに、西鶴の姿が浮き彫りされてゐる。

藤村氏の「構想」に健實な解剖を試みて奇を衒ふことなく、平易に説き來つてしかも外郭から心髓にまで通つてゐるところ、流石に老大家の貫録である。一般智識層の古典愛好家を對象としてゐるので、若い學究徒には食ひ足りぬかも知れぬ。口演とは思はれぬ整つた文体は、氏の豊富な経験から生れたものであらう。「本質」を説明する陣駿氏は、日本の經濟史の上に立つ西鶴の位置から説き起してゐる。「一代男」の「後には様つけて呼」をテキストとして、史實まで引用して手落ちなく本質を究明しやうとしてゐる。新しい感覺を交へて眺めやうとする氣配が窺はれるが、これは本筋の研究に水を割る恐れがありはしまいか。

片岡氏は「近代文學」の中に西鶴的な強烈な氣魄を見出さうとして、島崎藤村から野間宏に至るまでの作品を丹念に拾ひ上げてゐる。極めて懇切丁寧で、文學に心魂を傾ける氏の情熱が紙面に溢れてゐる。文章の晦澁は、時間に追ひかけられて述べ盡せぬ言葉の途迷ひが爲せるわざか。最後に大學の教壇に立つて西鶴を講義した經驗を持つ里見氏が「私見」として、獨特の慧眼を光らせて、實作家の立場から大先輩西鶴を甜め回してゐる。尻切れとんぼではあるがユイモアに富み學究者異つた廣い觀點からよく西鶴を擗へてゐる。

斯り並べてくると、一貫した西鶴研究の總まりは持ち得ぬかも知れぬが、各人各様の西鶴觀は一應覗ふことが出来、且つ各人共にさわりの段をも聴かせてくれてゐる。新聞社ででもなければ、これだけの人を一

堂に集めることは困難であらう。末尾に西鶴の年譜と研究書目とを加附したことは、將來とも西鶴研究者に重寶がられることであらう。(朝日新聞社刊B 6版・定價一二〇圓)

中西 善三

(一四一頁ヨリ續ク)

して行つてゐるが、細部をみると各自それぞれの特徴がある様である。即ち春合が師の說に反對し、李主尊崇を喜ばなかつた事は、當時の學界に於ては大いに偉とするに足る。又南郭の詩に於ける階級性的の問題も時代が時代だけに注目される考へである。

最後に三者共通の考へは中國音音讀說と詩語に對するものである。特に詩には詩獨自の言葉が在在しなければならぬと説いたのは、徂徠の考へが、弟子達にも自然と染み渡つたものであるかも知れぬ。これが後世に詩語集成となつて發展して行つたことは、後の文學論を考へる上に大切であると思ふ。